

戦前期日本の医学界で 仮性包茎カテゴリーは使われていたか

—1890-1940年代の実態調査の言説分析—

澁谷 知美

Abstract

The purpose of this study is to assess the truth of the following hypothesis: “In Japan, the term ‘false phimosis,’ denoting a shameful condition, was fabricated and spread by the cosmetic surgery industry that developed after World War II for purposes of customer development. Thus the word ‘false phimosis’ was hardly used in prewar medical circles, which were distanced from the cosmetic surgery industry, and men were not ashamed of false phimosis at that time.” To examine this hypothesis, we collected medical surveys on phimosis done from the 1890s to the 1940s, and analyzed whether the category “false phimosis” was used and/or the notion of shame at false phimosis was mentioned in those surveys. As a consequence of examining twenty two surveys, the hypothesis was denied. Medical surveys performed from the 1890s through the early 1920s hardly used the category. On the other hand, almost half the surveys from the 1930s to the 1940s used the category. Five surveys mentioned how men felt about false phimosis, and three reported that young men felt shame at it. Analysis therefore demonstrates that the term “false phimosis” was already in use in prewar medical circles and that notions of shame at false phimosis existed among men in that era.

1 問題

級友の包茎ばらすクラス会（影無）¹⁾

この研究の問いは、次の仮説は妥当なのか、である。「日本において「仮性包茎」という概念は、戦後に発達した美容整形業界が広めたものである。集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という価値観がいわば“捏造”された。よって、戦前の、当該業界とは一線を画す

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

医学界においては、「仮性包茎」という概念はさほど広まっていなかった。また、男性たちも仮性包茎を恥じていなかった」。

美容整形としての包茎手術 *cosmetic circumcision* が問題になっている。広告で示されていたのとは異なる高額な手術代を請求されるなどの消費者問題として（国民生活センター 2016）、あるいは、手術の失敗によりペニスが醜く変形してしまうなどの医療被害問題として（飛波・岩室・山本 2000）である。また、医学的にはなんの問題もない仮性包茎の男性が、広告にまどわされて悩むといったことも起きている（北村 2016）。

このような直截的な問題とは別に、象徴的な水準での問題もある。包茎手術（とその広告）は、セックスにおける「覇権的な男らしさ *hegemonic masculinity*」（Connell 1995）の延命に手を貸している、という問題である。包茎手術が謳う「効用」のひとつに、「男の自信を取り戻す」というものがある²⁾。こうした「効用」の説明が内包するのは、膣へのペニスの挿入を「ノーマル」とみなすセックス観と、女性を「リード」し、快楽へと「導く」、男性像である。包茎手術（とその広告）がふりまくこのようなセックス観／男性像³⁾には、「覇権的な男らしさ」が凝縮されている。包茎手術という実践や、その広告という言説実践は、Butler (1990) の言い方を借りれば、行為遂行的 *performative* に、こうした価値観を再生産している。

日本人男性のうちどれくらいが、美容整形としての包茎手術を受けているのか、それを示す信頼に足る統計は現在のところ存在しない。ただ、国民生活センターに過去5年間に寄せられた包茎手術をめぐるトラブルは1,092件であり、この間、寄せられるトラブルの数に「大きな減少はみられな」という報告があることから（国民生活センター 2016: 1）、包茎クリニックの数もまた減っておらず、一定数の男性たちが美容整形としての包茎手術を受けているものと推察できる。また、包茎について悩んでいる者は少なくとも⁴⁾、潜在的な「手術患者予備軍」は日々生産されつづけていると見てよい。

なお、美容整形としての包茎手術が対象とする主な症状は、「仮性包茎」といわれるものである。仮性包茎とは「通常は包茎の状態であるが、用手的に包皮を反転すると、亀頭が露出可能なもの」と定義される（『南山堂 医学大辞典』第20版、2015年）。仮性包茎について書かれた英語の医学論文はほとんどない（石川 2005: 80）ため、ローカルかつ通俗的な概念といえる。原則として手術は不要とされる。しかし、切除は不要とする医師と、積極的にすすめる医師との間で、熱い論争が繰り返されている（*ibid.*: 36-54）。

ところで、言説分析による性の歴史学（Foucault 1976）および歴史社会学（赤川 1999）の視点から見渡したとき、こうした日本の包茎手術をとりまく現状は、「男性身体の医療化 *medicalization of male body*」という概念で把握されうる。これまで存在しなかった性や身体にまつわる症状が、ある時から言説によって“捏造”され、「実体」をとめないだし、権力（ここでは医学や医療ビジネス）による身体の介入を許す——というのがこの視点で描か

れるストーリーだ。この視点で「仮性包茎」を見たとき、「これまで存在しなかったが、ある時、“捏造”されることによって、身体への権力の介入を許した概念」として描くことが可能だろう。

では、「ある時」とは、いつのことだろうか。それは、1970年代ごろではないだろうか。包茎手術をビジネス化し、「金勘定ばかりの“実業家”」（大冊1991:149）とも評価される、美容整形外科医の高須克弥がこのような証言をしている。

「僕が包茎ビジネスをはじめるまでは日本人は包茎に興味がなかった。僕、ドイツに留学してたこともあってユダヤ人の友人が多いんだけど、みんな割礼しているのね。ユダヤ教徒もキリスト教徒も。ってことは、日本人は割礼してないわけだから、日本人口の半分、5千万人が割礼すれば、これはビッグマーケットになると思ってね。雑誌の記事で女の口に「包茎の男って不潔で早くてダサイ！」「包茎治さなきゃ、私たちは相手にしないよ！」って言わせて土壤を作ったんですよ。昭和55年当時、手術代金が15万円だね。〔中略〕まるで「義務教育を受けてなければ国民ではない」みたいなね。そういった常識を捏造できたのも幸せだなあって（笑）」（鈴木・高須2007:81-2）。

高須は「昭和55年」といっているが、それ以前の1970年代から、『平凡パンチ』、『週刊プレイボーイ』などの雑誌メディアには包茎手術をすすめる記事が散見される（澁谷2013b)⁵⁾。1970年代は、美容整形外科業界そのものが伸張していった時期である⁶⁾。一方で、1970年代以降の若者の間には、性にたいする自由な雰囲気広がりがつつあった⁷⁾。美容整形としての包茎手術が市民権を得る、十分な条件が揃っていたということが出来る。

高須の証言が本当だとすれば、「仮性包茎」概念をつうじての男性身体の医療化は、戦後にはじまったということになる。そこでこの研究では、次の仮説に妥当性があるか否かを検証することを目的とする。「日本において「仮性包茎」という概念は、戦後に発達した美容整形業界が広めたものである。集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という価値観がいわば“捏造”された。よって、戦前の、当該業界とは一線を画す医学界においては、「仮性包茎」という概念はさほど広まっていなかった。また、男性たちも仮性包茎を恥じていなかった」。

この仮説が肯定されれば、仮性包茎概念の「歴史の浅さ」が明らかになり、すでに医学界の一部でいわれている（ものの、包茎クリニックの膨大な広告によってかき消されがちな）美容整形としての包茎手術の「不要性」が、歴史社会学的な見地から裏づけられることが期待される。そして、さきほど述べた「実践的な問題」が解決するかもしれない。つまり、不要な包茎手術をしようとする人びとが減ったり、不幸な消費者問題や医療問題が減るかもしれない。仮性包茎の男性がいたずらに悩むことも無くなるだろう。また、象徴的には、包茎手術やその広告がふりまく「覇権的な男らしさ」を反映した性をめぐる価値観が弱体化する

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

かもしれない。「男らしい」セックスができずに悩む男性や、「男らしい」セックスによって迷惑を被っている女性のQOLの向上につながる。

また、学術的な効用もある。「男性身体の医療化」と呼ぶのにふさわしい現象が確認されれば、特に医療化されやすいといわれる女性 (Reissman 1983) の身体をめぐる問題との比較が可能となり、身体の医療化のメカニズムのジェンダー対象性／非対象性の分析が可能になる。

上の仮説の妥当性を確認するため、この発表では、次の2つの作業仮説を検討する。

作業仮説① 明治～昭和戦前期、「仮性包茎」というカテゴリーを、包茎に関心を持つ日本の医学者——美容整形外科医ではなく、「一般的な」医学に従事する医学者——が使用する頻度は低い。

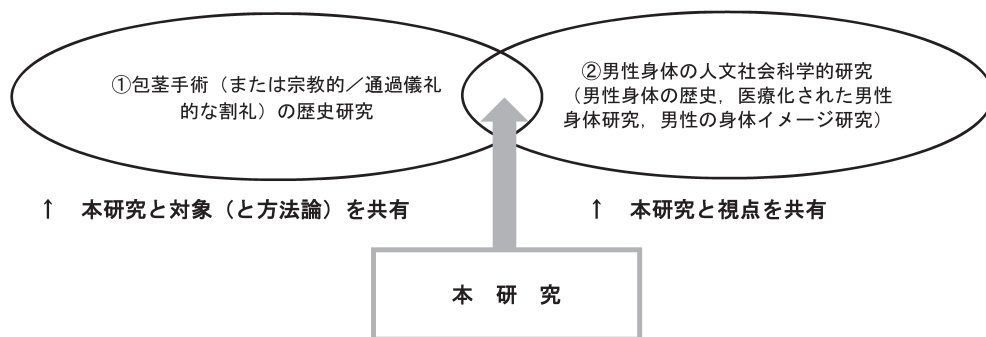
作業仮説② 同時期、仮性包茎は、男性にとって恥ずかしいものではなかった。

①の検討によって、戦前期の「一般的な」医学者（美容整形医ではない医学者）たちのあいだに「仮性包茎」という概念が存在しないことが確認されれば、「戦後に発達した美容整形業界が広めた」という仮説は、傍証されることになる。また、②の検討によって、戦前の男性たちが仮性包茎を恥じていないことが確認できれば、現在、仮性包茎に付与される「恥ずかしい」という価値観が、仮性包茎概念ともども戦後の美容整形業界によって“捏造”されたといえる可能性が出てくる。

先行研究との関係における本研究の位置づけについて説明する。本研究は、①包茎手術（または宗教的／通過儀礼的な割礼）の歴史研究と研究対象（と方法論）を共有し、②男性の身体研究（男性身体の歴史、医療化された男性身体研究、男性の身体イメージ研究）と視点を共有している（図1）。

①には、たとえば、現代の医療化された包茎手術の歴史を、紀元前23世紀のエジプトの儀礼的割礼から説きおこす医学史研究 (Dunsmuir and Gordon 1999) が該当する。ただし、この研究でなされているのは宗教的／通過儀礼的割礼の起源さがし、あるいは西洋の外科的

図1 先行研究との関係における本研究の位置づけ



包茎手術の技術史であり、本研究が明らかにしたい問い「日本において仮性包茎概念は、美容整形業界によって“捏造”されたのか？」に答えを与えるものではない。ペニスについての膨大な歴史的記述の一部として割礼に言及する Bonnard and Schouman (1999=2001: 170-196)、同じくペニスの歴史の一部として「イエスの包皮の聖性」に触れる Friedman (2001=2004: 99)、宗教的割礼の歴史である Chebel (1992=1999) の研究も同様である。

①に分類されるもののうち、研究対象のみならず方法論が似通っているのは、形質人類学者の吉岡と武藤による包茎および割礼についての概論である(吉岡・武藤 1983: 22-56)。吉岡と武藤はこの概論のなかで、「日本人にはどれくらいの頻度で包茎があるのだろうか」(Ibid.: 27) という問いをたて、本研究と同様に明治期から昭和戦前期におこなわれた包茎の実態調査を縦覧し、そのパーセンテージをまとめている。しかし、本研究とは異なり、「仮性包茎」という用語がいつごろ調査で使われはじめたかということには注意を払っておらず、まとめているのはもっぱら、現代でいう「真性包茎」の頻度のみである。

②は本研究と視点を共有する先行研究である。フェミニズム以降の男性学のインパクトを受けた男性の身体研究(男性の身体イメージ研究、医療化された男性身体研究、男性身体の歴史)が含まれる。性や身体の研究といえば女性のそれが対象となる現状(荻野 1993: 57-63)や、「身体イメージについて語るのは女やゲイがすること」という社会通念(Hargreaves and Tiggemann 2006)を批判的にとらえ、男性の性や身体を積極的に分析対象としていく姿勢に、これらの研究は貫かれている。同様のものに、*Medicalized Masculinities* (Rosenfeld and Faircloth eds. 2006) に収録された一連の論文や、Tiefer (1994)、Bederman (1995)、澁谷 (2015 [2003], 2013a) による研究などがある。

②のうち、本研究ときわめて近い位置にあるのが、2015年に刊行された *Male Circumcision in Japan* である(Castro-Vazquez 2015)。シンガポールの社会学者である著者が、日本人の男女に包茎のイメージや手術の経験についてインタビューした。結論部では、「Kimmel (2001) のいう「手術はいつも家父長制を再生産する」という主張は正しい」ことが確認されている(*ibid.*: Conclusion, Patriarchy and the Male Body, para.1)。また、切除された包皮が、ジェンダー化され性化された男性の自我を構成する重要な要素となっていることも指摘されている(*ibid.*: Conclusion, Patriarchy and the Male Body, para.2)。包茎手術という対象も、フェミニズム以降の男性学/男性研究に特徴的な反家父長制的スタンスも、本研究と共通している。ただし、歴史研究ではないこと、「仮性包茎」概念の生成が明らかになっているわけではないことは、本研究と異なる点である。

2 方法

明治～昭和戦前期に発表された包茎にかんする論文のうち、包茎や非包茎のパーセンテ

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

ジを明らかにしようとする実態調査をピックアップし、「仮性包茎」カテゴリーを使用しているか否か、言説分析をおこなった。実態調査に対象をしぼったのは、各種包皮の状態が各調査者なりに明確にカテゴライズされており、調査者である「一般的な」医学者たちの認識が、より先鋭的に反映されていると考えたためである。吉岡・武藤（1983: 30）で引用されている調査、各調査が引用する先行する調査、国立国会図書館の論文DBでキーワード「包茎」で検索してヒットした調査を収集した。

集まった調査は22件であった。うち21件は医学や保健の専門家によるものだが、1件は非専門家によるものである⁸⁾。1920年代の調査は1つしかなく、時代による偏りがある。いずれの調査も、人体のあらゆる部位を計測しようとする、近代以降の形質人類学や優生学や犯罪学（Gould 1981=1989）の影響下にあるように思われる。植民地主義の時代相が垣間見えるかのような、北京の銭湯にひそんだスパイがとった「支那人」のデータ（川村1931）、日本人受刑者と朝鮮人受刑者の比較をおこなう調査（笹部1940）、中国・新郷の病院の外来患者を対象とした調査（1941）、中国大陸にルーツを持つであろう研究者が日本語で発表した調査（陶・徐1936）が、これらの調査群に含まれる。また、データの多くが徴兵検査または入隊後の定例検査で収集されたものであり、調査の数々は軍国主義の産物であることも付言しておかねばならない⁹⁾。

3 結果

3-1 作業仮説①（「仮性包茎」カテゴリーについて）の検討

作業仮説①「明治～昭和戦前期、「仮性包茎」というカテゴリーを、包茎に関心を持つ日本の医学者——美容整形外科医ではなく、「一般的な」医学に従事する医学者——が使用する頻度は低い」については、「1920年代はじめまではそのとおりだが、1930年代以降はそうではない」という結果が得られた。

表1は、戦前期の包茎調査が使用している包皮の状態のカテゴリーとその割合を一覧にしたものである。表1によれば、1920年代はじめまでは、6種類の調査中、「仮性包茎」のカテゴリーを使用しているのは1種類にとどまっている。現代であれば「仮性包茎」と呼ばれるであろう状態は、「外観的包茎」、あるいは、「皮被り」のうち「包皮をして容易に亀頭を通過せしめ能ふもの」などの名称で呼ばれていた。

ところが、1930～40年代は15種類の調査中8種類と、半分以上の調査が「仮性包茎」カテゴリーを使用している。定義の例は以下のようなものである。いずれも、①ふだんは亀頭が出ていない、②手をもってすれば亀頭を露出することができる、という点で共通している。

「亀頭は包皮によりて全く包囲せられ一見包茎の如きも、包皮口大にして容易に亀頭を露出

表1 戦前期の包茎調査

論文発表年	調査時期	調査者など カッコ内は論文に記載の肩書	被調査者の 属性と人数	包皮の状態と割合：単位%(*0)				論文名と収録誌名
				低	包皮翻転の度合い	高		
1	1899	記載なし 調査者：長澤康人 報告者：足立文太郎	広島歩兵連隊485人	「平時亀頭の全部 或一部包皮を以て 覆はるるもの(即 ち皮被り)」のう ち「包茎」 0.8%	「平時亀頭の全部 を露出するもの (即ち「包 皮をして故意に 亀頭に被らしむ れは其全部或は 一部を被ひ居る ことの出来るもの」 の出来るもの) 65.4%	「平時亀頭の全部 を露出するもの (即ち「亀 頭を覆はしむる こと能はざるも の」) 5.6%	「本邦人陰茎の包皮に就 て」『東京人類学会雜 誌』161号、426-34頁	
2	1888-96 (1895-6年 は除く)	和田尚楠	全国の陸軍師管の徴兵検査受 験者。人数不明	包茎 150名	—	—	「包茎ノ統計」『千葉医 学専門学校校友会雑誌』 26号、74-6頁	
3	1897-9	岡善次郎		包茎 559名	—	—		
4	1906	矢田耕造	浜田連隊区徴兵6090人	絶対的包茎者＝亀 頭ノ全部ヲ露出シ 能ハザルモノノニ 亀頭を全部露出セシ メ能ハサルモノ 0.99%	外観的包茎者＝亀 頭ノ全部露出セザ ルモノニ包皮ノ平 常全ク亀頭ヲ被包 スルモノ 14.73%	平常露出ノ半バ ヲ露出セル者 23.32%	「日本人ノ先天性包茎ニ 就テ」『医事新聞』733 号、674-9頁	
5	不明(*1)	1917(*2)	矢野・梶塚 山形連隊区壮丁	包茎 1.5%	仮性包茎 65.1%	否包茎 (中等度露出及完全露出) 33.4%	「第二師管陸軍軍医分団 仙台支部記事」。下記中 島論文20頁に引用	

戦前期日本の医学界で仮性包莖カテゴリーは使われていたか

6	1920		平島今朝義			絶対的包莖＝亀頭ヲ露出シ能ハザルモノ 36.182%	外観的包莖＝亀頭全部露出セザルモノ 20.987%	亀頭半露ヲ出セルモノ 39.981%	亀頭全部ヲ露出スモノ 2.894%	「日本人ノ陰莖ト包皮トノ関係」『北越医学雑誌』35年3号、184-92頁
7	1932		川村狂堂	北京の風呂屋で観察した青年以上の「支那人」と思われる入浴者。学生、軍人、小官吏、教職員、商人、社員が多くを占めると考えられる。1770人	不開皮者 33.841%	不開皮者		半開皮者 18.305%	全開皮者 47.853%	「支那人の陰莖の包皮に就いて」『滿蒙』1932年2月、44-54頁
8	1930年度		杉山亀之助 (陸軍二等軍医正)	広島連隊区衛兵検査を受けた壮丁(受検時と1年後)	包莖 1% (市部と郡部、年次、職業の違いなし)	記載なし	記載なし	包皮ノ冠状溝迄翻転セル者 ●入隊時 37.8% (広島市出身) 60%内外 (郡部出身) ●第一年終了時 50% (広島市出身) 増減なし (郡部出身) ●職業別 66.9% (農業者) 57.1% (職人) 6.9% (商人) 44.8% (学生) 32.2% (学生)	「陰莖包皮ノ翻転度ト性憎トノ関係ニ就テ」『軍医団雑誌』225号、469-70頁	
9	1933	記載なし	中島榮太郎 (陸軍一等軍医)	陸軍の身体検査を受けた健康な兵、馬丁、雇傭人、志願者 300人	包莖 2.7%	仮性包莖 34%	中程度露出 35.3%	完全露出 28%	「陰莖ノ形態ニ関スル一、三ノ研究」、「同一(承前)」、「日本医科大學雑誌」4巻8号、1139-66頁、4巻9号、1281-308頁	
10	1934	1934年度	須野敏夫 (陸軍二等軍医正)	大村連隊区の壮丁中身長155cm以上の5670名	包莖 0.69%	記載なし	記載なし		「壮丁ノ腋毛陰毛及包莖ノ小観察」『軍医団雑誌』259号、2138頁	

11	1935	記載なし	日下正大勇 (横須賀海軍兵団)	285人	包莖手術を実施した海兵団員	真性包莖 20%	仮性包莖 80%	調査対象外	「包莖手術ノ実験並ニ包莖ニ関スル二三ノ觀察」『日本泌尿器科学雑誌』24巻8号、619-48頁
12	1932年度	記載なし	石館文雄(北海道帝國大学医学部衛生学教室)・横井稔(北海道帝國大学医学部耳鼻喉科教室)	初年兵、二年兵合計580名	包莖 9人(16%)	包莖 9人(16%)	平常時亀頭の全部或は一部包莖を以て覆はるるもの。但し包皮は亀頭冠を通過せしめ得るもの 194名(33%)	平常時亀頭の全部を露出するもの 377名(65%)	「兵士の月例身体検査に於けるニ、三統計に就て」『日本医事新報』663号、1432頁
13	1936	記載なし	岡藏(上海自然科学研究所病理学科衛生学研究室)、徐大哉(上海東華医学院衛生学教室)	江蘇省在任の17~35歳の学生青年。半数は江蘇省人、半数は全中国より。583名	(1) 被包し露出不可 2.7%	(2) 被包するも露出可能 52.5%	(3) 露出するも被包可能 43.7%	(4) 露出するも被包不可 1.0%	「正常中国人ニ於ケル陰莖包皮ニ關スル觀察」『上海自然科学研究所彙報』6巻別冊4、107-16頁
14	1937	記載なし	奥田正治(北海道帝國大学医学部内科学教室・重医中尉・医学士)・川瀬利光(同上)	札幌華兵第二十五連隊士(主として北海道中部出身者)1076名	真性包莖 1.6%	仮性包莖 51.1%	中等度露出 27.30%	完全露出 23.70%	「中部北海道兵員の包莖に就て」『日本医事新報』787号、3575-6頁
15	1937年2月上旬~3月中旬の毎日正午~午後4時	記載なし	角田 茂(日本大学皮膚科泌尿器科教室(助手))	1937年度の日本大学歯科、工科、医科への入学志願者のうち健康な者500名(満17歳以上満25歳以下)	包莖 0.8%	仮性包莖 42.6%	中等度露出 29.8%	完全露出 26.8%	「日本人青年の陰莖の形態並に体格及び年齢との比較」『臨床の皮膚泌尿と其境域』2巻、687-93頁
16	1938年7月	記載なし	笹部三郎(保健技師)	網走刑務所に収容中の内地人受刑者1224人、朝鮮人受刑者103名	真性包莖 2.2%(内地人) 2.8%(同20-30歳) 2.4%(同31-40歳) 0.4%(同41-61歳) 1.9%(朝鮮人)	仮性包莖 33.4%(内地人) 42.4%(同20-30歳) 30.5%(同31-40歳) 20.3%(同41-61歳) 30.1%(朝鮮人)	非包莖者 64.4%(内地人) 54.8%(同20-30歳) 67.1%(同31-40歳) 79.3%(同41-61歳) 68%(朝鮮人)	「受刑者の陰莖包皮に就て」『行刑衛生学雑誌』15巻、161-5頁	

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

17	1941	記載ないが、1939年の日本泌尿器学会総会で発表したとの記述あり	吉内巖一 (山崎市日本鋼管病院皮膚科医長)		IV型 包皮は完全に亀頭を覆ひしかもその包皮口は狭小にして大豆大乃至新頭大に過ぎず且つ包皮口の皮膚は伸張性無く、為に亀頭露出不可能なもの 1.5% (15-19才) 0.5% (20-24才) 0.2% (25-30才) 0.3% (30-34才) 0.4% (35-39才) 0.8% (40-44才) 0.9% (45-49才) 5.1% (50-54才) 0.0% (55-60才)	III型 亀頭は包皮口より完全に覆はる包皮口は広大にして脱却し冠状溝の後面に來らしめ得るもの 40.7% (15-19才) 19.1% (20-24才) 11.0% (25-30才) 9.1% (30-34才) 6.8% (35-39才) 12.5% (40-44才) 15.2% (45-49才) 10.2% (50-54才) 11.8% (55-60才)	II型 包皮は亀頭冠を越えて亀頭の一部分及び従て亀頭は其の一部分のみを露出するもの 26.8% (15-19才) 23.5% (20-24才) 18.9% (25-30才) 16.1% (30-34才) 12.5% (35-39才) 7.9% (40-44才) 7.2% (45-49才) 8.1% (50-54才) 82.4% (55-60才)	I型 亀頭は完全に露出して包皮は僅かに冠状溝乃至は亀頭冠の部分を覆ふもの 30.3% (15-19才) 56.2% (20-24才) 67.9% (25-30才) 72.8% (30-34才) 73.6% (35-39才) 77.9% (40-44才) 79.1% (45-49才) 83.1% (50-54才) 82.4% (55-60才)	「包茎と年齢」『治療医学』485号、10-1頁
18	1939年9月 ～1940年3月	柳谷紀一 (同仁会新橋診療所) 外来患者のうち成人男子190名	柳谷紀一 (同仁会新橋診療所) 医学士)	医学	真性包茎 1.1%	仮性包茎 38.9%	完全露出 60%	「新穎に於ける井上反応、血型、包茎に就て」『同仁会医学雑誌』15巻10号、793-6頁	
19	1941年	柳谷紀一 (同仁会新橋診療所) 医学士)	柳谷紀一 (同仁会新橋診療所) 医学士)	医学	真性包茎 2.7% (高工生)	仮性包茎 33% (高商生) 45.8% (高工生)	半開 44.5% (高商生) 31.2% (高工生)	上記の柳谷論文793頁に引用	
20	1942	記載なし	荒木作次郎		真性包茎 13.7%	仮性包茎 55.3%	(呼称記載なし) 31%	「集団検査ニ於ケル包茎ト外尿道口ノ所見ニ就テ」『日本泌尿器科学雑誌』32巻4号、449頁	
21	1939年11月 15～30日の 午後1～6時	藤巻快教 (瀧州医科大学皮膚科教授)	藤巻快教 (瀧州医科大学皮膚科教授)	医学	真性包茎 0%	仮性包茎 50% (既婚者) 49.7% (未婚者で性交経験者) 61.2% (未婚者で性交未経験者) 0% (未婚者で性交未経験者)	非包茎 50% (既婚者) 48.8% (未婚者で性交経験者) 38.8% (未婚者で性交未経験者)	「陰茎の大きさとその膨脹率に就て」『瀧州医学雑誌』22巻臨時増刊号、245-78頁	
22	1939年9月 中旬～10月 中旬	武波恒太 (日本鋼管病院皮膚科)	武波恒太 (日本鋼管病院皮膚科)	医学	真性包茎 23%	仮性包茎 16～60歳の重工業従業員で、体格良好、兵役関係者多数含む。東北地方出身者が多く、他地方の者は少ない。3372人	第一度 包皮を以て亀頭全部を完全に覆ひ得るもの 67%	「陰茎の寸度及亀頭の形に就て」『臨床の皮膚泌尿と其境界』8巻、240-3頁	

(*) 分類については本文参照。数値は筆者が再計算し、小数点第一位で四捨五入した。合計が100%にならないものもある。また、宮内(1941)は包皮の状態を5種類に分けているが、5番目のタイプは「検査時に既に包茎手術を行つて居たもの」という他調査にはない分類であり、比較が不可能であるため除外している。
 (*1) この調査結果を引用している中島論文には、「第二師管陸軍軍医分団山台支部記事(自大正六年至昭和元年)」とあるだけで、詳細な発表年は不明。
 (*2) 「矢野、梶塚阿氏が大正六年徴兵検査ノ折ニ調査シタルモノ」との記述が中島論文にあることから、1917年のみの統計として掲載した。

し得、而も勃起時に於て亀頭を露出するも疼痛を伴はざるもの」(中島1933: 1157), 「亀頭は包皮により全く包圍され一見包莖の如きも包皮口大きく容易に亀頭を露出し得る程度」(角田1937: 692), 「包皮により亀頭の大部分被はれたるもの、及び強力を用ふれば包皮をして亀頭冠状溝まで後退せしめ得るもの」(笹部1940: 162)

以上をまとめると、1890年代末から1920年代はじめは、たしかに仮性包莖カテゴリーの使用頻度は低かった。しかし、1930年代から1940年代はじめはおよそ半分の調査者たちが使用しており、同概念の使用頻度はけっして低いものとはいえない、という結果となった。

3-2 作業仮説②(「恥」の感覚について)の検討

作業仮説②「同時期、仮性包莖は、男性にとって恥ずかしいものではなかった」についても、おおむね否定的な結果が得られた。すなわち、分析対象の調査のうち、同時代の男性たちが持つ包莖の価値観について言及する調査は5種類あったが、うち3種類において「包莖(≡皮被り)であることを日本の男性たちは恥じている」という主旨の言説が確認された。

まず、「恥」言説の代表例として、足立(1899)が挙げられる。皮が翻転している男性たちに、足立がかつて質問をしたところ、彼らの多くが手で皮をたくし上げていたことを告白した。また、この調査の受検者である広島 of 兵士たちも同様だった。たくし上げる理由として、博士は「恥」の感覚を挙げている。

「所謂皮被りなるものは本邦男子の大に恥となすを以てなり其大人に近きても其己れの陰莖の尚皮被りなるを見て各自亦自らの陰莖は通常ならざるものと誤認し皮被りなりとして自ら恥つるなり」(足立1899: 431, 強調原文)

また、恥の感覚が生じる背景として足立は、第一に「皮被りは通常の状態ではない」という誤認、第二に皮被りは包莖と外見がよく似ており、どちらも皮被りと呼ばれること、を挙げている。なお、ここでいう「皮被り」は現代でいうところの仮性包莖状態、「包莖」は真性包莖を指す(後述)。

「之を恥づることは蓋し一つは誤認即ち皮被りは通常に非ざるものなりと思ふ事一つは彼の包莖と外見上能く類似し而して之と共に皮被りなる一名称の下に置かるを以てなるべし」(足立1899: 432)

わざわざ皮をたくし上げなければならないほど、当時の男性にとって仮性包莖状態は恥ずかしいものであったことが、これらの記述から分かる。

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

また、宮内（1941）は、包茎に悩む青年と、その悩みにつけこむ商売について書きとめている¹⁰⁾。

「本邦に於ては世人一般は「皮かむり」と称して包莖を以て寧ろ異常なりと考へ秘かに之を恥ずるの風があつた。〔中略〕此の如き状態なるが為に青年の中には全く正常なるもの又は未だ發育の過程にあるものにも拘らず自ら之を異常、不具の類と思惟し懊々として楽しまざるに至る事がある。一時包莖治療器と称するものが頻々と新聞広告に現れたのも之等の心理に乗じたものであらう」（宮内 1941: 10）

藤巻（1942）は、留保を付けつつも、亀頭が出ている者（＝仮性包茎ではない者）が「優越感」をおぼえる風潮があると述べている。

「余も又一般に皮被りを以て敢えて羞恥と云ふ程には感ぜざるも、陰莖の完全形態の一構想として、亀頭完全露出を以て或る優越感を覚ゆる如き風習あるを暫々耳にする」（藤巻 1942: 272）

いっぽう、2つではあるが、恥の感覚は薄れている、とする言説も存在する¹¹⁾。平島（1920）は、さきの足立の行論を意識しつつ、「誤認と羞恥の念」を有する者は少なくなっているようだという。奥田・川瀬（1937）もまた、仮性包茎の増加の要因として同様の推察をする。

「本邦に於ても社会一般に知識の進歩と日常生活の繁忙とは斯る割損の風習の如きを減じ且つ前述の如き包莖に対する各自の誤認と羞恥の念とを有するもの少数となり包莖数の多きを見るに至りたるに非ざるなきか」（平島 1920: 190）

「所謂皮被りなるものに対する羞恥感を懐く者なく先天的發育の自然状態の事を示すものと思惟す」、「仮性包莖者の数は完全露出者と全く反比例して時代の推移と共に増加するも、対象年代以後略々同率に固定したるは、所謂皮被りに対する羞恥觀念の消失に拠るものと思惟す」（奥田・川瀬 1937: 3575; 6）

3-3 その他の「仮性包茎」概念をめぐる事実関係

作業仮説を検証する過程で、次の「仮性包茎」概念にまつわる事実を確認した。

第一に、今日では同一のものと思われがち「包莖」と「皮被り」を、異なる概念として把握する論者が複数いた。たとえば足立（1899）は、論文中でわざわざ「注意」と付記して、「皮被りとは〔中略〕包莖 Phimosi s のみを云ふにあらず」といい、「皮被り」の下位カテゴ

リーとして「包莖」を位置づけている。

図2 足立(1899:428)が調査に用いた分類(一部を転載)

「注意 日本人の所謂皮被りとは常に包皮をして龟头を通過せしめ能はざるもの即包莖 Phimosi s のみを云ふにあらずして龟头冠を通過せしめ能ふも平時龟头の全部或は一部之を覆ひ居るものをも総称するなり」(足立 1899: 427)

て或平時
一全部龜
部龜頭の
包莖の全
被るもの
り) (即皮
被るもの
を以て)

百四十一人

包莖包莖
能龜頭を
ふ頭をな
も頭をな
の通過し
せしめに
て容易に

百三十七人 四人

また、川村(1932)も、「皮被り」の下位カテゴリーとして「包莖」を位置づけている。

「三 不開皮 即ち俗に云ふ皮被り

- 1 包莖 (Phimosi s) 即ち開皮し能はざるもの
- 2 故意に包皮を翻転すれば龟头の一部又は全部を露出し得るもの
- 3 「2」の場合、手を放せば原位置に返へるもの
- 4 「2」の場合、手を放つも開皮のまゝなるもの」

(川村 1932: 47, 傍点原文)

「第三の不開皮者 に就て……。其の中に所謂包莖者なるものが幾パーセントを占めて居るかは知り得たい所ではあるが、今は其の手段のないのを遺憾とする。けれども私は其の皮被りの大部分は殆ど包莖者で占めて居るのではなからうかと疑つて居る」(川村 1932: 48, 傍点原文)

1930年代の終わりになると、用語が混乱していることを前提とし、整理を促すかのような言説も見られた。「元來包莖と称せらるゝは、真性包莖のみ」(奥田・川瀬 1937: 3575)。

第二に、包莖の度合いがもっとも高い状態と、もっとも低い状態の割合は、前者で0～約36%、後者で1～約83%と、調査ごとに開きがある。この傾向は、吉岡・武藤(1983)の指摘と同様である。

第三に、包莖が増えているという認識を持つ調査者が複数おり、「都市化によって精神の純粋性を失った青年たちがオナニーをするようになり、包皮が伸びたため」などと説明をしている。この説明をするのは中島(1933)である。過去の調査と比べ、龟头完全露出の数が少なくなったことをふまえて、次のように原因を分析する。

「農村の青年は比較的純朴にして性的早熟の率都会に比して著しく低く、手淫を習慣とすること亦少きにより包皮は自然の發育をなし徒らに延長することなく、陰莖体及龟头の發育と共に(或は人工的に)包皮は龟头後溝に退き、茲に完全露出の龟头を觀るも、都会に於

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

けるものは性的早熟にして手淫を行ふ青少年頗る多く、包皮の弛緩延長を来し、亀頭を露出状態に在らしめんとするも能はざるによるものなり」(中島 1933: 1156-7)

同様の原因追究は、学生の包茎を調査した角田(1937)もおこなっている。

「従来の統計を見ると日本人は一般に外国人に比して包莖者が少い様に報告されてゐる。然し私の調査並に、二、三の先輩の報告を見ると完全露出の亀頭は必ずしも多くはない。〔中略〕その原因は恐く青少年に於ける過度の手淫に因るものと思はれる。」「包皮過長の年々増加する理由は手淫に因る事が第一で時代の風潮に流れる文化生活の副産物とも言ふ可き「エロティシズム」の横行に連れて一般青少年者の性的早熟の傾向が顕著である事を示唆する」(角田 1937: 693)

また、「完全露出が少ないのは、手淫が原因」という角田(1937)の論は、他の調査者(柳谷 1941)によっても肯定的に引用されている。

「角田氏は、我国に仮性包莖の漸増するのは、結婚難と近代のエロチシズムに関係があるとし、これに伴ふ学生青年の Onanie こそが包莖が増し、完全露出の少くなる原因であると述べて居る」(柳谷 1941: 796)

ちなみに、包莖増加の現象は、「西洋化」として把握されている。

「少くとも年と共に包莖数を増加する傾向ありて其数に於て西洋人のものに近づきつゝありと言ふを得」(平島 1920: 191)

4 結論と考察

以上の結果をふまえると、冒頭に述べた2つの作業仮説は次のように修正されなければならない。

作業仮説① 「明治～昭和戦前期、「仮性包莖」というカテゴリーを、包莖に関心を持つ日本の医学者——美容整形外科医ではなく、「一般的な」医学に従事する医学者——が使用する頻度は低い」

→修正後「1920年代はじめまでは使用頻度は低いが、1930年代から1940年代半ばまでの調査においては、およそ半数の医学者たちが「仮性包莖」カテゴリーを使用している」

作業仮説② 「同時期、仮性包莖は、男性にとって恥ずかしいものではなかった」

→修正後「恥ずかしいという価値観はすくなくとも1890年代末から存在した」

当初の問いに戻る。当初の問いは、以下に述べる仮説は妥当なのか否か、であった。そして、「妥当ではない」が結論である。「日本において「仮性包茎」という概念は、1930年代から存在した用語を利用しながら、戦後に発達した美容整形業界が広めたものである。集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という価値観がいわば“捏造”された。よって、戦前の、当該業界とは一線を画す医学界においては、「仮性包茎」という概念はさほど広まっていなかった。また、男性たちも仮性包茎を恥じていなかった」。

では、この仮説はどのように修正されるべきだろうか。「日本において「仮性包茎」という概念は、戦後に発達した美容整形業界が広めたものである」の部分は、1930年代以降の医学者たちのおよそ半数が採用していたことを考えると、ひとり戦後の美容整形業界のみが広めた、ということではできない。だが、さきの高須の証言などもふまえると、既に戦前の医学界で確立しつつあった「仮性包茎」という概念／実体を、戦後の美容整形業界が商業化の対象としつつ広めた、ということまでは否定されないと思われる。

「集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という価値観がいわば“捏造”された」の部分はどのように修正されるべきだろうか。1890年代末以降、仮性包茎状態にたいする「恥」の感覚はすでにあったことが調査から明らかになった。足立が出会った男性たちは、皮被り状態と思われるのが恥ずかしくて、検査で皮をたくし上げていた（足立1899: 431-2）。包茎を恥とする男性心理をついた商売の存在（宮内1941: 10）や、留保つきながらも、亀頭が出ている者が「優越感」を持つ風潮があったことの報告（藤巻1942: 272）も、仮性包茎状態にたいする「恥」の感覚の存在を裏書きするものである。したがって、戦後になって美容整形外科医がいきなり「恥」の感覚を広めたということはいえず、“捏造”という言葉を用いるのは事実と反する。

ただ、すでにあった「恥」の感覚が、戦後の美容整形外科医たちによって“利用”されたということではできないか。とすれば、冒頭の仮説は以下のように修正される。下線部が修正箇所である。

「日本において「仮性包茎」という概念は、1930年代から医学界で使われはじめ、戦後に発達した美容整形業界が商業化の対象とし、広めたものである。集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という、すでにあった価値観が“利用”された。よって、戦前の、当該業界とは一線を画す医学界においては、「仮性包茎」という概念は1930年代をむかえるまではさほど広まっていなかった。いっぽう、男性たちの、仮性包茎を恥じる意識は存在した」。

以上の結論が持つ理論的含意について考察したい。戦後の美容整形外科医による包茎手術のポピュラー化は、「仮性包茎にたいする恥感覚の現代化 modernization of shame on false phimosis」を伴っていた、というのが本研究から引き出せる理論的示唆である。

戦前の「恥」の感覚と、戦後のそれは質的に異なる。戦前のものは、いわば「土着の恥感覚」とでもいうべき感覚だ。足立は、皮被りにたいする恥の感覚の背景にあるのは、第一に

戦前期日本の医学界で仮性包莖カテゴリーは使われていたか

「皮被りは通常の状態ではない」という誤認、第二に皮被りは包莖と外見がよく似ており、どちらも皮被りと呼ばれることである、と述べた(足立 1899: 432)。これらは、「皮被りに恥を覚える理由」の説明に見えて、ほとんど何も説明していない。これらの述懐を深掘りして、では、なぜ「通常の状態ではない」と恥ずかしいのか、なぜ「包莖」に外見が似ていると恥ずかしいのか、を問うたところで、「恥ずかしいから恥ずかしいのだ」という以上の答えは出てこないからである。これ以上、遡及不可能な感覚という意味をこめて、戦前の仮性包莖／包莖状態にたいする恥の感覚を、「土着の恥感覚」と呼びたい。

ところが、戦後の「恥」の感覚は(断言するには、さらなる調査が必要だが)様子が異なる。「[雑誌の記事で女の口に「包莖の男って不潔で早くてダサイ!」「包莖治さなきゃ、私たちは相手にしないよ!」って言わせて土壤を作った」(鈴木・高須 2007: 82)のだとすれば、戦後の恥の感覚の醸造には、美容整形医や雑誌メディアはもちろん、フィクションとしての「女性の意見」が介在していたことになる。これは、「土着の恥感覚」とはだいぶ性格が異なる。

とはいえ、両者は「恥」という点では同質であり、完全に異なるものでもない。とすれば、すでであった「土着の恥感覚」は、1970年代以降に跋扈する「あたらしい恥の感覚」が着床する土壤として、恥の感覚が現代ふう刷新されるのを助けたのではないか。「男根中心主義をノーマル化する normalizing phallocentrism」事態として勃起薬バイアグラの登場を把握した Tiefer (1994) に倣い、この事態を「仮性包莖にたいする恥感覚の現代化」と呼びたい。

今後の課題について述べたい。この研究がもたらす利益として、「仮性包莖概念の「歴史の浅さ」を明らかにすることで、「美容整形としての包莖手術の「不要性」が、社会学的な見地から裏づけられることが期待される」と冒頭で述べた。しかし、明らかになったのは、予想に反して、仮性包莖概念にも仮性包莖状態にたいする「恥」の感覚にも、それなりの歴史があることであった。

だからといって、「美容整形としての包莖手術は必要である」という結論が即座に導かれるわけでもない。「仮性包莖」を調査カテゴリーとして使うこと(戦前の「一般的な」医学界)と、「仮性包莖」に「不潔」などの意味を付与をしたり、「女性の意見」を動員することで、男性たちを手術に誘導すること(戦後の美容整形業界)とは、別の現象である。今後は、両現象のつながりを明らかにすべく、1940年代までには医学界に定着したとみられる「仮性包莖」概念が、どのようにして1970年代以降の美容整形業界によって意味付与され、商業的に“利用”されていくのかを明らかにすることを課題とする。

付記：本稿は2016年10月8日におこなった第89回日本社会学会での発表を原稿化したものである。調査にあたっては、東京経済大学個人研究費を用いた。

資料の引用にあたり、旧漢字を新漢字に、漢字カタカナ交じり文を漢字ひらがな交じり文に改めた。

謝辞：2015年6月20年に京都市左京区にて開催された性欲研究会、2016年7月6年に東京経済大学にて開催された人文カフェで草稿の発表を行い、有益なコメントを得た。記して感謝する。

注

- 1) 『毎日新聞』2016年7月18日朝刊3面に掲載の読者による川柳。
- 2) 以下のURLはそのものずばり「包茎手術で男の自信を取り戻す 見る見る大きくな〜る」と名うたれたサイトのもの。<http://meridianastudio.com/syujyutu.php>. 2016年10月6日取得。ただし、急いで付け加えなければならないのは、こうした物言いが前提とする「強い男」像とは別に、「清潔かつマナーを守る男」像、「恥ずかしがる男」像も包茎手術をすすめるメッセージの中には存在するということである。「包茎は“マナー違反”」(『週刊実話』2010年12月16日:48)、「包茎のままで女性の介護士に下の世話をしてもらうのは恥ずかしい」(『新潮75』2013年11月9日:210)といった言説がある。包茎手術メッセージの中のさまざまな男性像については別稿を期す。
- 3) このセックス観を、別の言葉で言い換えれば、挿入至上主義的なセックス観といえるだろう。すなわち、男性のオーガズムを重視し、女性のオーガズムを引きだす行為を「前戯」として等閑視する、男性目線のセックス観(Jackson 1999: 11)である。
- 4) たとえば、日本家族計画協会が開設する「思春期・FP(家族計画)ホットライン」に、男性から寄せられた悩みのうち最も多いのは「包茎」にかんする悩みで、総相談件数1315件のうち20.9%を占める。包茎の相談が1位を占める傾向は1995年度から変わらない(日本家族計画協会2016)。
- 5) 包皮を切除する外科手術そのものの歴史は長い。本文にも述べたとおり、紀元前23世紀には、エジプトで宗教的割礼が行われていた(Dunsmuir and Gordon 1999)。日本では18世紀後半にはすでに手術が行われていたようだ。華岡青洲の治術を記した『華岡氏治術図識』が「我邦最初の詳細なる記録〔中略〕ではあるまいか」といわれている(中野1936: 70)。なお、「包茎」という用語は、17世紀末から18世紀半ばには存在したようだ。同時期に活躍した近世中期の儒医・香川太伸(修徳)が「皮包ム(二)陰莖(一)」と著書で書いており、これが包茎という言葉のルーツであろうと本間玄調(1847)が述べている(『瘍科秘録』巻二、七-八)。本間玄調の情報は、日本学術振興会特別研究員の小泉友則氏の教示による。
- 6) 日本で「美容整形」という名称が一般に浸透してきたのは戦後である。1978年に「美容整形」は標榜科に認められる。同時期に、美容整形を独立した科目とみなす開業医中心の「日本美容外科学会(JSAS: Japan Society of Aesthetic Surgery)」, 形成外科と美容外科を親子関係とみる医師が中心の「日本美容外科学会(JSAPS: Japan Society of Aesthetic Plastic Surgery)」という同名の学会が設立された(川添2011: 31)。
- 7) 女性の婚前交渉の経験率は「性の自由化」を示す指標になりうる。1999年に日本放送協会がおこなった調査によれば、調査当時50代だった女性の初体験の相手は約6割が「配偶者」だ

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

- ったのに対し、調査当時40代だった女性の初体験の相手は約6割が「婚約者」「恋人」「友人」「顔見知りの人」だった。つまり、前者が青春を過ごした1960年代はまだ婚前交渉が一般的ではなかったが、後者が青春を過ごした1970年代には婚前交渉を許容する雰囲気があったということになる（NHK「日本人の性」プロジェクト編2002:225、澁谷2015[2003]:162）。
- 8) 当時の医学界の状況を知ることが目的である以上、非専門家の調査をも分析対象とすることに疑義があるかもしれない。しかしながら、この非専門家＝川村狂堂（1932）は、専門家である足立文太郎（1899）のカテゴリーを意識しながら調査をおこなっているため、分析対象とすることに問題はないと判断した。なお、川村論文は、2009年2月に国際日本文化センターで行われた研究会時に、当時同センターの研究員であった唐権氏から教示いただいた。
 - 9) 性器露出検査は1871年の徴兵検査開始時からあったようだ（澁谷2013a:413）。1871年以降は、日本人男性のほとんどが、生涯に一度は医師の前に性器を差し出さねばならなくなった。これは日本の男性の身体史至上はじめてのことであり、この頃に男性身体のセルフイメージが何らかの変化をきたした可能性がある。なお、川村狂堂が「スパイ」だったと考えられる根拠については、保坂（2007）参照。
 - 10) 宮内は「切除手術」は「不必要」という立場であり、手術の不要性を示すために、調査を実施し、年齢に応じて仮性包茎状態が減り、亀頭露出が増えていくことを実証した（宮内1941:10）。
 - 11) 参考までに、「支那人」はまったく皮被りを恥としないであろう、とする言説がある。北京の銭湯で包茎調査をした川村狂堂が書きとめている。「支那人には皮被りを恥とする風習はない、のみならず皮被りは不完全であるかどうか、大人の亀頭は本来露出すべきものであるかどうかなどと考へて見たこともなからう。従つて外見を気にして故さらに開皮を装ひ、又は開皮の自己療治を行ふ習慣もなからう」（川村1932:54）。

引用文献（表1に掲載のものを除く）

- 赤川学，1999、『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。
- 石川英二，2005、『切ってはいけません！——日本人が知らない包茎の真実』新潮社。
- NHK「日本人の性」プロジェクト編，2002、『データブック NHK日本人の性行動・性意識』日本放送出版協会。
- 大拙博善，1991、『美容（外科）整形の内幕』医事業業新報社。
- 荻野美穂，1993，「身体史の射程——あるいは、何のために身体を語るのか」『日本史研究』366，39-63。
- 川添裕子，2011，「流動的で相互作用的な身体と自己——日本の美容整形の事例から」『国立歴史民俗博物館研究報告』169：29-54。
- 北村邦夫，2016，「手術広告にだまされないで」『毎日新聞』2016年8月10日朝刊：25。
- 国民生活センター，2016，「美容医療サービスにみる包茎手術の問題点」，国民生活センターサイト，（2016年10月6日取得，http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20160623_2.pdf）。
- 澁谷知美，2013a，『立身出世と下半身——男子学生の性的身体の管理の歴史』洛北出版。
- ，2013b，「包茎とチンポ国粋主義」井上章一編『性欲の研究——エロティック・アジア』平凡社，164-8。

- , 2015 [2003], 『日本の童貞』河出書房新社。
- 鈴木おさむ・高須克弥, 2007, 「鈴木おさむの伝説の男 10人目 高須クリニック院長 高須克弥」『週刊プレイボーイ』2007年6月11日: 80-2。
- 飛波玄・岩室紳也・山本直英, 2000, 『まちがいだらけの包茎知識』青弓社。
- 保坂修二 2007 「アラビアの日本人——日本のムジャーヒディーン」『中東協力センターニュース』2007年12月・2008年1月: 43-51 (2017年1月29日取得, <http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/11-05/11-05-41.pdf>)。
- 中野操, 1936, 「昔の包茎の手術」『臨床の皮膚泌尿と其境域』1: 68-71。
- 日本家族計画協会, 2016, 「本会家族計画研究センター 2015年度事業実績報告」『家族と健康』747号 (2016年10月6日取得, http://www.jfpa.or.jp/paper/activity_report/000651.html)
- 本間玄調, 1847, 『瘍科秘録』巻二。
- 吉岡郁夫・武藤浩, 1983, 『性的人类学——形質人類学の空白領域』共立出版。
- Bederman, Gail, 1995, *Manliness & Civilization: a Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*, Chicago: University of Chicago Press.
- Bonnard, Marc and Michel Schouman, 1999, *Histoires du pénis: le sexe de l'homme vu au travers de la médecine, la psychologie, la mythologie, l'histoire, l'ethnologie et l'art*, Paris: Éditions du Rocher. (=2001, 藤田真利子訳『ペニスの文化史』作品社。)
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge. (=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社。)
- Castro-Vázquez, G., 2015, *Male circumcision in Japan*, Kindle Version, Retrieved from Amazon.com.
- Chebel, Malek, 1997, *Histoire de la circoncision: des origines à nos jours*, 2e éd, Paris: Éditions Balland. (=1999, 盛弘仁・盛恵子訳『割礼の歴史——一〇億人の包皮切除』明石書店。)
- Dunsmuir, W. D. and E. M. Gordon, 1999, "The history of circumcision," *British Journal of Urology International*, 83 (Suppl. 1), 1-12.
- Foucault, Michel, 1976, *La volonté de savoir*, Paris: Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I ——知への意思』新潮社。)
- Friedman, David M., 2001, *A Mind of Its Own: a Cultural History of the Penis*, New York: Free Press. (=2004, 井上廣美訳『ペニスの歴史——男の神話の物語』作品社。)
- Gould, Stephen Jay, 1981, *The Mismeasure of Man*, New York: Norton. (=1989, 鈴木善次・森脇靖子訳『人間の測りまちがい——差別の科学史』河出書房新社。)
- Hargreaves DA. and M. Tiggemann, 2006, "Body image is for girls': a Qualitative Study of Boys'Body Image", *Journal of Health Psychology*, 11 (4): 567-76.
- Jackson, Stevi, 1999, *Heterosexuality in Question*, London: Sage Publications.
- Kimmel, Michael S., 2001, "The Kindest Un-Cut: Feminism, Judaism, and My Son's Foreskin," *Tikkun*, 16 (3) (2016年10月6日取得, <http://www.cirp.org/pages/cultural/kimmel1/>).
- Riessman, Kohler, 1983, "Women and Medicalization: a New Perspective," *Social Policy*, 14 (1), 3-18.
- Tiefer, Leonore, 1994, "The Medicalization of Impotence: Normalizing Phallocentrism," *Gender &*

戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか

Society, 8 (3): 363-77.

Rosenfeld, Dana and Christopher Faircloth eds., *Medicalized Masculinities*, Philadelphia: Temple University Press.